

「共同テーブル」発足！ 8/18

ネットの野党と市民・労働者の共闘

◆菅首相の後継を巡る総裁選に右往左往する自民党の狂騒の中で、8日には立憲民主、共産、社民、れいわの4党が市民連合と総選挙を闘う野党共通政策に合意した。この流れに先立ち8月18日には高信氏らが参院議員会館で記者会見を開き、「いのちの安全保障確立に向けて」非正規社会からの脱却を目指すためのネットワーク「共同テーブル」発足を発表。8月28日には国会近くの星陵会館で「共同テーブル」の理念と今後の方針を討議する第1回オンライン・シンポジウムが開催された。8・28シンポジウムには、佐高さんがコーディネーターを務め、発起人から白石孝さん、竹信三恵さん、沖繩の山城博治さんらがそれぞれの思いを語り、連帯挨拶に福島瑞穂社民委員長、岡崎宏美新社会党委員長、漢人明子緑の党運営委員があいさつした。こうして、自公・維新保勢力に対抗して、総選挙に向けた野党4党と市民連合、もう一つの野党と市民・労働者の共同への挑戦が始まった。

「共同テーブル」とは何か、何をめざすのか。それぞれ発起人の思いも多様であるが、立憲民主党が「日米同盟機軸」に立つ以上、憲法9条堅持とともに「この国のかたち」と対米隷従政治の根本にある日米安全保障条約に対する態度を鮮明にし、戦争のための日米軍事同盟を「いのちの安全保障」にかえ、アジア民衆と平和創造の道を歩む「第3のネットワーク型政治勢力」形成への大きな流れに発展することを期待する。その原動力とイニシアティブは、生活と労働、地域に根差した違いを認め合う運動の多様な発展による。私たちも共に力を合わせたい。(一部資料を「提言」より転載させていただきました。コモンズ編集部)

「いのちの安全保障確立に向けて—非正規社会からの脱却を目指す」新たな挑戦



「共同テーブル」呼びかけ文 いのちの安全保障確立に向けて—非正規社会からの脱却宣言—

32歳で急逝した歌人、萩原慎一郎が「非正規という受け入れがたき現状を受け入れながら生きているのだ」と歌った。彼は「箱詰めされた社会の底で潰された蜜柑のごとき若者がいる」とも歌ったが、非正規があたり前のようにになっているこの社会の異常さは、格差拡大や、沖縄への軍事基地の押しつけや、歯止めなき環境破壊となって噴出している。

なくすしの改憲への動きもその一つである。日本国憲法には理念があり思想がある。「戦争はすべてを失わせる。戦争で得たものは憲法だけだ」と城山三郎は言った。

非正規社会からの脱却をめざす革新勢力の結集の軸に私たちは憲法の理念の実現を掲げる。それをあいまにして結果としても、腐敗した保守勢力(公明党、維新を含む)に傾斜するだけである。原爆を落とした加害者のアメリカに追随し、被害者となった中国を敵視するのでは、憲法に基づく平和外交を展開できない。どんなに困難であっても、アメリカと中国双方に等距離の位置から、できるだけ、国家の水位を低くする努力を積み重ねる必要がある。そして喫緊の課題の脱原発である。

主にこの三つの立場を明らかにして、新たなプラットフォームを形成したい。社会民主党は「革新勢力」が「分裂や対立を繰り返してきた」ことを反省し、「新社会党や緑の党をはじめ、基本政策が一致する多くの政党・政治団体・市民団体と日本を変えるためにネットワークを強化する」と表明したが、それを実現するために新たなムーブメントを起こしたい。

端的に言えば、いのちの安全保障確立に向けて非正規社会からの脱却をめざす運動を起こすということである。

2021年7月起草 発起人を代表して 佐高 信

「共同テーブル」発起人(8月15日現在・アイウエオ順)

浅井基文(元広島平和研究所所長・政治学者・安積遊歩) アカウセラ(雨宮処凛作家・活動家・伊藤誠(経済学者) 植野妙実子(中央大学名誉教授・憲法学) 上原公子(元国立市市長) 大内秀明(東北大学名誉教授・憲法学) 大川昭彦(弁護士・元国教授連絡センター運営委員) 海渡雄一(弁護士・鎌倉孝夫 埼玉大学名誉教授) 鎌田輝(ルポライター) 金城実(彫刻家) 額綱厚(山口大学名誉教授・歴史学者) 古今亭菊千代(落語家) 佐高信(評論家・清水雅彦(日本体育大学教授・憲法学))

白石孝(NPO法人「アライズ」研究センター理事) 杉浦ひとみ(弁護士・竹信三恵子(ジャーナリスト・和光大学名誉教授) 武建一(全日本建運連連帯労組関西地区生コン支部) 田中優子(前法政大学総長) 島井平(全統一労働組合・中小労組政策ネットワーク) 前田朗(東京造形大学名誉教授) 宮子あずさ(看護師・ライター) 幸佐月(小説家・タレント) 山城博治(沖縄平和運動センター議長) (事務局) 藤田高景/石河康国



現場無視の小学校オンライン授業に 異議の校長処分 大阪市長・維新松井の恫喝

松井 一郎・大阪市長が唐 突にオンライン学習を宣言。今年4月に3回目となる学校現場で混乱を起したことや教育行政について、松井市長が原則オンラインの意見を市長に送った。大阪市立木川小学校の久保敬校長を、大阪市教育委員会(市教委)は文書訓告とした。

突然の市長発言をマスコミ報道で初めて知ることになった久保校長は、憤り、意欲でしかないと市教委は主張した。市教委は主眼とした。市教委は主眼とした。市教委は主眼とした。

オンライン授業などを経てから各校に、午後5時帰宅してプリント学習するなどの独自の方針を決めて各学校に通知した。こうした方針は、本来なら先に市教委が主体となって決めるべきものである。にもかかわらず市教委が無視して松井市長が独断で突っ走ったわけだ。市教委は市長こそ抗議すべきだ。久保校長は提言書で、そのお粗末な状況が露呈したわけだが、その結果、学校現場は混乱を極め、何より保護者や児童生徒に大きな負担がかかっている」と市長と市教委の対応を批判したわけだ。

市長と市教委の対応を批判したわけだ。市長と市教委の対応を批判したわけだ。



8/28 「共同テーブル」発足記念シンポジウム 各識者、危機的隘路の日本の政治状況を告発

◆次期衆院選を間近に控え、18日に発足した「共同テーブル」が8月28日、発足記念シンポジウム「いのちの安全保障を考える」を東京都千代田区の星陵会館で開いた。評論家・弁護士・学識経験者などが国を代表する有識者が現存の日本が抱える諸問題をそれぞれ訴えた。沖繩からは、沖繩平和運動センター議長の山城博治さんや辺野古県民投票の会元代表の元山仁郎さんが、名護市辺野古の新基地建設を巡る問題や先島諸島で進む自衛隊基地建設をの現状を報告した。

山城さんは、政府が中国脅威論を強調し、先島諸島に自衛隊基地の建設を進めていることについて、沖縄が戦場になることへの理解を県民に迫っている。また、その上で「県民は政府の無謀な戦争政策で、度ならず二度まで、玉碎を求められるのだろうか」と問い掛け、戦争の脅威にさらされている沖縄と本土との共闘を訴えた。

官野市からオンラインで参加した元山さんは、沖縄防衛局が27日に新たな護岸工事に着手したことについて、県民投票で反対多数の民意が示されたが、新しい護岸が迫られようとしていて、悲しさと悔しさを覚える。次期衆院選に向けて新基地建設をやめさせる取り組みをしていくことを表明した。

山城さんは、政府が中国脅威論を強調し、先島諸島に自衛隊基地の建設を進めていることについて、沖縄が戦場になることへの理解を県民に迫っている。また、その上で「県民は政府の無謀な戦争政策で、度ならず二度まで、玉碎を求められるのだろうか」と問い掛け、戦争の脅威にさらされている沖縄と本土との共闘を訴えた。

山城さんは、政府が中国脅威論を強調し、先島諸島に自衛隊基地の建設を進めていることについて、沖縄が戦場になることへの理解を県民に迫っている。また、その上で「県民は政府の無謀な戦争政策で、度ならず二度まで、玉碎を求められるのだろうか」と問い掛け、戦争の脅威にさらされている沖縄と本土との共闘を訴えた。

山城さんは、政府が中国脅威論を強調し、先島諸島に自衛隊基地の建設を進めていることについて、沖縄が戦場になることへの理解を県民に迫っている。また、その上で「県民は政府の無謀な戦争政策で、度ならず二度まで、玉碎を求められるのだろうか」と問い掛け、戦争の脅威にさらされている沖縄と本土との共闘を訴えた。

時代転換ムーブメントを

『いのちの安全保障を考える「共同テーブル」からの提案』集会に参加して

今日、様々な意味で、危機と転換を深める時代状況の中で、それを何とか打ち破ろうという共通の意思を持った人びとが、社民党、新社会党、緑の党、そして市民が、新たなムーブメントを起すためのプラットフォームを打ち出すには、何が重なるのか、という感覚はある。だが、それは、今時代は私たちが思っている以上に急速な崩壊過程でもあり、それゆえ時代転換の一大チャンスでもある。今日、危機的状況の中で、ではどうするか、どこから何から始めるべきか、現状認識において集まった人たちに大きな差異はないと思う。

だが、やはり年齢の高い人たちの発想であり、より大胆な構想、大戦略を打ち出すには、何が重なるのか、という感覚はある。だが、それは、今時代は私たちが思っている以上に急速な崩壊過程でもあり、それゆえ時代転換の一大チャンスでもある。今日、危機的状況の中で、ではどうするか、どこから何から始めるべきか、現状認識において集まった人たちに大きな差異はないと思う。



